

ワーテルローにおけるポスト・コロニアルな戦い

— 『フィネガンズ・ウェイク』の“Willingdone Museyroom”について —

豊田 宣 是

The Post-Colonial Battle of Waterloo in “Willingdone Museyroom” in *Finnegans Wake*

TOYODA Noriyuki

はじめに

ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』(1939年)¹の“Willingdone Museyroom”(8.09-10.23)という挿話は、帝国側によって作られた表舞台の歴史を植民地側から書き換える作業となっている。この論の目的は、その書き換えの過程を辿ることである。

素材は、1815年6月18日のワーテルローの戦い。ウェリントン率いるイギリス軍と、ナポレオン率いるフランス軍が対決した戦いである。舞台は、この戦いの勝者を記念する架空の歴史博物館。書き換えるのは、アイルランド人女性ツアーガイドである。

この書き換えに関して、注目すべき点は三つある。第一点は、ウェリントンの非情な帝国主義者としての姿が強調されること。第二点は、植民地アイルランドの視点の導入により、英仏の対立が帝国対植民地の対立に置き換えられること。第三点は、結末部分にセポイの反乱(1857-59)が重ねられ、セポイを想起させる hinndoo Shimar Shin なる人物によって、ウェリントンの愛馬がナポレオンの三角帽もろとも爆破されることである。

当論考では、以上三つの書き換えについて順を追って検証していく。

1. 帝国主義者と独立戦争

この章では、ウェリントンの帝国主義者としてのイメージを取り出したい。

初めに、このイギリスの英雄に敬意を表し、略歴を記しておいてもよいだろう。アイルランドのダブリンに生まれたアーサー・ウェレズリーは、イートン校を経て、フランスのアンジュ士官学校で学ぶ。1803年には、イギリスのインド支配に抵抗し略奪を重ねるマラータ王国勢力を相手に、「セポイの将軍」(ナポレオンによる侮蔑的表現)として数々の勝利を収める。また、対ナポレオン戦争にも参戦し、1813年にはフランス軍をイベリア半島から撤退さ

せ、その功績によりナポレオン退位後ウェリントン公爵に除せられる。

これを植民地側の視点から読み直した場合、このようにウェリントンの業績を偉業として讃える記述に対して一つの疑念が生じる。つまり、これは帝国側の視点から書かれたものではないのかという疑いである。この挿話におけるウェリントンの呼称 *Willingdone* は、一見して、*Wellington* に形容詞 *willing* を重ねたものであり、自ら進んで行動し偉業を成し遂げた人物を表していると思われる。

しかし、そのような賞賛の裏には、イギリス帝国主義に貢献するウェリントンに対する植民地側からの冷やかな眼差しが隠されている。それが最もよく表れているのは、次の箇所である。

This is the big Sraughter Willingdone, grand and magentic in his goldtin spurs and his ironed dux and his quarterbrass woodyshoes and his magnate's gharters and his bangkok's best and goliar's goloshes and his pulluponeasyan wartrews. This is his big wide harse. (8.16-21)

これは姿の大きな大虐殺者殺(や)る気満慢ウイリンドン、威風堂堂、魅力たっぷり、身につけているのは金色に輝くスズ製の拍車、鉄の輝きを放つ鋼爵ズボン、真鍮を四分の一使った木靴、有能な指導者らしいゲートル、椰子の繊維で編んだ最強のベスト、遍歴詩人ゴリアテ風オーバーシューズ、ずり落ちても簡単に引っ張り上げられるワーテルロー戦用股引風ズボンです。こちらは彼のデカ尻白馬です。

明らかに、「大虐殺者」(“Sraughter”: *slaughter + rough*)² という言葉は、ウェリントンを讃えるものではない。帝国側にとって、この「鉄の公爵」(“ironed dux”: *Iron Duke*) (8.18-19) は確かに有能な指導者(“dux”: *L leader*)に違いない。しかし、植民地側から見れば、彼が征服者にすぎないことがここに示されていると言える。

征服者といえば、アイルランド人にとって、*Willingdone* という名前はまた、あの忌まわしきウィリアム三世を想起させるものでもあろう。これはウェリントンの帝国主義者のイメージをより強調するのにふさわしい。ウィリアム三世とは、1690年「ボイン川の戦い」(“boyne”) (8.21) でジェームズ二世側のカトリック軍を打ち破り、イギリスによるアイルランド支配を決定づけた王なのだから。

この引用箇所では、ウェリントンの征服者という姿を強調するために、戦争の名前が合計七つ埋め込まれている。その中でウェリントンに関わる戦いは二つ。ひとつはワーテルローの戦い(“wartrews”: *Waterloo + war + trews*)、もうひとつはその前哨戦であるカトル・ブラの戦い(“quarterbrass”: *Quatre Bras*)である。その他の戦いはみなウェリントンとは全く関係がない。

注目すべきなのは、残り五つのうち三つが独立戦争であることである。ウェリントンに織

り込まれている戦争が、単なる国家間の勢力争いではなく、圧政からの解放を求める独立戦争であるのは、帝国主義に貢献するウェリントンの恐ろしさを印象づけるためには、極めて効果的であるように思われる。ウェリントンの任務は、イギリスを脅かす反乱分子を抑え、帝国による植民地支配の安定化を遂行することでもあった。その姿が“big”や“grand”という言葉によって大きく膨れ上がるように描写されているのも、それが暴徒たちを鎮圧し、彼らの土地を自らの領土として包摂し拡大していく帝国主義の具現化として考えれば、得心がゆく。³

ウェリントンに重ねられた独立戦争のひとつは「威風堂堂、魅力たっぷり」(“magnetic”: magnetic + majestic) に隠されていたマジエンタ (Magenta) の戦いである。それは第二次イタリア独立戦争中の1859年6月4日イタリア北部ミラノ西方の町マジエンタで、ナポレオン三世率いるフランス、サルディニア連合軍がオーストリア軍を破り、イタリアが独立の足がかりをつかんだ戦いである。⁴

二つ目は1302年7月11日に起きたゴールデン・スパース (Golden Spurs) の戦いである。この戦いはフランドルのCourtraiという町の約600人の農民が、約4000人のフランスの騎士を相手に戦ったものである。この戦いで農民たちが奇跡的な勝利をおさめ、フランドルはフランスの圧政から解放され、独立を果たすのである。この名前は農民たちが戦闘のあと、騎士たちの金色に輝く拍車をはぎ取ったことに由来している。⁵

三つ目は、Roland McHughの注釈書には言及がないが、ウェリントンの履く“goliar’s goloshes”に織り込まれているテキサスのGoliadで起こった反乱である。1812年から13年にかけて、その町でメキシコ人(新大陸生れのスペイン人)たちが、スペイン本国による支配に対して不満を爆発させ、反乱を起こす。これがきっかけとなり、1821年にメキシコはスペインから独立を勝ち取るのである。⁶

ところで、このGoliadはペリシテ人の巨人戦士ゴリアテ (Goliath) を想起させる地名でもある。実は、この名前は1810年のメキシコ反乱の指導者Miguel Hidalgo y Costillaにちなんでつけられたものである。それは“Hidalgo”からHを取り去り、残りの文字を並べかえたもので、Goliathのアナグラムになっている。⁷ そのイメージはまさに強い影響力をもち、周辺の家を圧迫する巨大な存在であるイギリスを代表するウェリントンにふさわしい。

さらに、“goliar”が連想させるものを考えてみると、遍歴書生詩人 (goliard) が思い浮かぶ。遍歴書生詩人は12世紀から13世紀にかけてドイツ、フランス、イングランドの各地を巡歴しながら、愛やワインを讃えるラテン語の風刺詩をつくり、王侯の間で吟遊詩人や道化役をした。もともと聖位を剥奪された修道士であったため、彼らの詩には教会の特権乱用に対する批判が含まれていたという。⁸ 彼らの巡歴の姿や正義感もまた、他国の侵略戦争に対抗し、帝国の維持安定に尽力するために世界各地を渡り歩いたウェリントンにふさわしい。ただし、ウェリントンが芸術とは無縁な人物であったことを考慮すれば、ここにアイロニーを感じ取ることできる。

Goliadという町はまた、悲惨な大虐殺があった場所としても歴史に名を刻んでいる。それ

が七つの戦争の中の六番目となる。これもまた、「大虐殺者」(“Sraughtler”) ウェリントンの恐ろしさを強めている。1821年に独立したメキシコは、1830年アメリカからの開拓者がテキサスへ来ることを禁止する。この政策に不満を覚えた者たちがテキサス革命を決起する。この戦いで、GoliadのJames W. Fanninの軍とメキシコ軍がこの町で衝突し、戦いに敗れたFannin軍のほぼ全員が銃殺に処せられるのである。⁹

しかしながら、この種の勢力争いにおいては、たとえメキシコ側が最終的に残虐な大虐殺を犯したとしても、メキシコを悪に仕立て上げることは難しい。なぜなら、現在Goliadを所有するアメリカ側から見れば、それは悪であろうが、当時両者が互いに所有権を主張し奪い合ったその土地は、もともと彼らとは無縁な土着民のものであったのだから。したがって、Goliadへの言及は、イギリスのための正義を貫いたウェリントンに対する最も辛辣な批判になっている。

七番目の戦争もまた、帝国批判になっている。それは“pulluponeasyan”に隠されているペロポンネソス戦争 (the Peloponnesian War) である。これは紀元前431年から紀元前404年まで2回にわたり、アテネとスパルタがギリシア世界を二分して覇権を争ったもので、ワートルローにおける英仏列強の対立によく似ている。この戦いは最終的にスパルタの勝利に終わったが、ギリシア全体を衰退へと向かわせる大きな転機となった。この共倒れのイメージは、ジョイス版ワートルローの結末を予兆するものかもしれない。

以上、ウェリントンに織り込まれている戦争を検証しながら、彼の帝国主義のイメージを取り出す試みを行った。さらに彼の帝国主義者の姿を補強する例として、再びWillingdoneという名前について考えてみたい。Willingdoneに最も近い綴りにWillingdonというのがある。この名前を持つのは、イギリスの外交官Freeman Freeman-Thomas, 1st Marquis of Willingdon (1866-1941) である。ウェリントンにWillingdonを重ねて読めば、先ほどの“pulluponeasyan” (8.20-21) は、私にはpull up one asyan [=Asian]と解釈できるように思われる。このアジア人に関して、当時の時代的な背景から浮かび上がってくるのは、インド独立の父マハトマ・ガンジー (1869-1948) しかいない。

ガンジーとの関係から見ると、Willingdonもまたウェリントンの帝国主義を補強する存在であることがわかる。ジョイスの『ユリシーズ』が出版された1922年、ガンジーは非暴力主義の立場から「無抵抗・非協力・不服従」をモットーとする反イギリス独立運動を展開していた。だが、彼の運動は1857年に起きたセポイの反乱のような大きな革命にインド全体を巻き込みかねない危険な状況をもたらしていた。当時マドラス管区を任されていたWillingdonは、そのような不穏な空気を察知し、ボンベイ管区のサー・ジョージ・ロイドとともに当時のインド副王ロード・リーディングを説得し、何ら明確な罪を犯してはいないガンジーの逮捕を踏み切らせたのである。¹⁰ この事件を考慮に入れると、“pulluponeasyan”に含まれているpull upは「拘引し、逮捕する」という意味に対応し、帝国による抑圧のイメージを強化するものとなる。

その後、インドの副王となった Willingdon は、ガンジーを説得して、1931年ロンドンで開催された第二回円卓会議に出席させ、植民地の独立に貢献している。¹¹ この史実を考慮に入れると、pull up はアジアの植民地人をイギリス帝国の人間と同じレベルまで「引き上げる」ことを意図する行為だったとも解釈できる。これはウェリントンにおける非情な帝国主義者のイメージを弱めるものである。しかし、残念ながら、これは時代錯誤的な読みでしかない。というのも、この挿話を執筆していた1926年のジョイスには、1931年に開催されたこの会議について知るよしもなかったからである。

II. ナポレオンとアイルランド、あるいは対立の崩壊

この章の目的は三つある。第一に、ナポレオン(軍)の受動的な姿を捉えること。第二に、その受動性を共通項にフランスとアイルランドが関連づけられ、英仏の対立の構図が帝国対植民地の対立の構図に置き換えられることを確認すること。第三に、英仏およびアイルランドが相互に深く結びついていることが示され、それによって英仏の対立がなし崩しされることを論証することである。

この挿話には、列国を相手に連戦連勝を重ねていた頃の、勇猛果敢に采配を振るうナポレオンは登場しない。また、ウェリントンのような帝国主義者というイメージもない。ナポレオン自身の行動への言及はほとんどなく、ただ彼の軍のみが紹介される。しかし恐ろしいウェリントンに比すると、極めて受動的な印象がある。まずはナポレオンが、というよりも彼の帽子が初めて紹介される場面を見てもらいたい。

(Bullsfoot! Fine!) This is the triplewon hat of Lipoleum. Tip. Lipoleumhat. (8.15-16)

(牛足! すごい!) これは脂ぎったデブレオンの三勝三角帽。チップ。脂ぎったデブレオン帽です。

ナポレオンに受動性を感じる原因は少なくとも三つある。第一の原因は、彼に与えられた Lipoleum という名前にある。Lipos はギリシア語で脂肪を表し、oleum は油剤を指す言葉である。したがって、脂肪をたっぷり蓄えたいささか滑稽な姿を想起させる。そのぜい肉は、ウェリントンが脇腹に携える「ロウソク用獣脂すくい型望遠鏡」(“tallowscoop”) (8:34) によってすくい取られるものであるかのようにさえ思える。このナポレオンはジャック＝ルイ・ダヴィッド (1748-1825) の絵画「執務室のナポレオン」に描かれた姿かもしれない。ここには Willingdone の与える恐ろしさは全く存在しない。このような象徴主義的な例として、William York Tindall は Nat Halper の言葉を紹介して、床材のリノリウム (linoleum) を彷彿とさせる Lipoleum は、ウェリントン・ブーツに踏みしめられる存在に落ちぶれていると述べ、Lipoleum

に含まれた“lip”に女性性の体現を指摘する。¹²

第二の原因としては、ナポレオンが不信の目で見られていることが指摘できる。彼に投げかけられる“Bullsfoot!”という言葉には、Bullshitが重ねられているように聞こえる。この感嘆詞は、「ばかな、うそだ」という不信・不承認の気持ちを表現するが、これはイギリスを打ち破って、アイルランドを解放できなかったことに対するワーテルローの敗者に向けられた非難の声かもしれない。であるとすれば、その声の主はアイルランド人だろう。なぜならば、その声は抑圧されたアイルランド人を想起させようとするかのように、かっこの中に押し込められているからである。

あるいは、その声はウェリントンを記念する博物館におけるナポレオンの不当な扱いに向けられたものかもしれない。なぜならば、ここで紹介されているのは、彼の三角帽のみであり、大きな白馬を伴う大きなウェリントン像と比較すると、あまりに扱いが軽いからである。また文字通り、この“Bullsfoot!”はナポレオンの足を直接表現した言葉かもしれない。であれば、これもまた滑稽な印象を生じさせるものとなる。

第三の原因は、ナポレオンが馬から引きずり下ろされていることである。一般に、ナポレオンと言えば白馬に跨る印象が強い。だが、ここでは愛馬マレンゴ(“Marengo”) (223.16) は影も形もない。¹³ 実は、慢性的な痔疾を抱えるナポレオンはワーテルローの戦いの前日痔の激痛に襲われ、馬にも乗れず、しばらくの間馬車で移動せざるを得なかった。¹⁴ ジョイスはそれを意識していたのかもしれない。一方、ウェリントンは気高さと権力を誇示する大きな白馬“big wide horse”に騎乗し、馬上から軍を指揮している。さらに実際は栗毛だった愛馬コペンハーゲンが、¹⁵ ハノーヴァー朝の象徴である白馬に替えられることによって、ウェリントンの権威がよりいっそう高められている。¹⁶ このような対照性によって、ナポレオンの弱さがひとときわ際だっている。

この受動性はナポレオンのフランスとアイルランドとを関連づけるための共通項として機能し、両者がともにイギリスによって支配される立場にあることが示される。これによって、帝国側の歴史観を反映した帝国列強の対立の図式が突き崩され、その裏にある帝国対植民地の対立の図式が前景化される。

では、フランスとアイルランドを関連づける部分を見てみよう。初めにフランス軍の三人の兵士が紹介され、その後イギリス軍の三人の兵士が紹介される。

This is the three lipoleum boyne grouching down in the living detch. This is an inimyskilling inglis, this is a scotcher grey, this is a davy, stooping. (8.21-24)

これは桶をかぶった三人のデブレオン少年兵、塹壕にぶつぶつ言いつつうずくまり、生ける屍状態。こちらは王立イニスキリング火打ち石軽小銃兵に所属するイングランド兵、こちらは灰色の馬に騎乗したスコットランド竜騎兵、こちらはダブリン海兵、かがみ込

んでいます。

“three lipoleum boyne”は、フランス軍に所属しているアイルランド系の少年兵たちのようである。少年として規定できるのは、“boyne”が英語の boy にデンマーク語で複数形を表す -ne を重ねたものであるからである。¹⁷ また、アイルランド系と見なせるのは、彼らがそれぞれ Touchole Fitz Tuomush, Dirty MacDyke, Hairy O’Hurryとして紹介されるからである。彼らの名前は、英語で普通の人々を指す Tom, Dick, and Harry に、Fitz-, Mac-, O’- というアイルランド人の典型的な名前に使われる接頭辞が重ねられたものである。

さらに、この三人にはウェリントン＝ウィリアム三世によって虐げられているアイルランド人の姿が重ねられている。彼らが少年であることを表す“boyne”という言葉は、まさにポイン川の戦いを喚起させる言葉だからである。

フランス軍に所属するアイルランド兵ということであれば、この少年兵たちはワイルド・ギース (the Wild Geese) の末裔かもしれない。ワイルド・ギースとはポイン川の戦いで敗北したジェームズ2世側についていた者たちで、故国を追われ、ヨーロッパのカトリック国フランスに渡り、職業軍人として活躍したアイルランド人のことである。

アイルランドを支配下に治めるイギリスの軍に、アイルランド兵がいることは事実である。そのため、フランス軍の少年兵たちはイギリス軍に所属する同胞と戦わなければならない。彼らが桶 (“boyne”: a flat shallow tub or bowl)¹⁸ をかぶり、塹壕 (“living detch”: living death + ditch) にうずくまったまま、生ける屍 (living dead) のように、ぶつぶつ不平を言い続けている (“grouching”: grouch + crouch) 理由は容易に理解できる。

彼らと対立する三人の英兵の中には、イングランド兵 (“inglis”) がいる。このイングランドの王立イニスクリング火打ち石軽小銃兵 (Royal Inniskilling Fusiliers) は、帝国による征服や抑圧のイメージを喚起している。なぜなら、彼に使われる“inimyskilling”にはkillingという言葉とともに、ポイン川の戦いの前哨戦であった1689年のエニスクリレンの戦い (Enniskillen) が重ねられているからである。

しかしながら、フランスとアイルランドの関連づけによって浮かび上がった帝国対植民地の図式は、イギリス、フランス、アイルランドの相互の関連づけによって、直ちになし崩しにされる。イギリス軍には、フランス軍のアイルランド兵の同胞であるダブリン海兵 (“davy”: Dublin + navy) がいる。このイギリス軍に所属するアイルランド兵は、他の兵士とは異なり、フランス兵たちのように、かがみ込んでいる (“stooping”) (8.23-24)。それによって、フランス軍のアイルランド兵と同じ立場であることが暗示される。柳瀬尚紀は、三人の英兵の全てがかがみ込んでいると解釈しているが、“stooping”を最後に紹介されたダブリン海兵のみを修飾する現在分詞と取れるように書かれている。¹⁹

このようにイギリスとアイルランドが関連づけられた上で、さらにイギリスがナポレオンに関連づけられる。ダブリン海兵を表す“davy”とはDavidの変形である。それをダヴィデへ

の言及と見なせば、ここに巨人ゴリアテ=ウェリントン対小さなダヴィデ=ナポレオンという対立の構図が浮かび上がる。このダヴィデのイメージは、芸術の面でも、アイルランドとナポレオンとを結びつけている。ダヴィデは豎琴の名手であったが、豎琴はまさにアイルランドの象徴である。また、少なくともナポレオンは、言葉によって自らの伝説を創作したという意味において芸術家であったことは確かである。ただ、伝説ではダヴィデはゴリアテを倒したが、ダヴィデ=ナポレオンはウェリントンに倒されている。そこに、ナポレオンに対するアイロニーを見出してもよい。

だが、ここにアイロニーではなく、英仏の対立の転倒を見出してもよいだろう。フランスをイギリスの上位に置くこのような転倒は、植民地側の視点からこの対立を捉えることを我々に要請するように思われる。植民地から見れば、イギリスを相手に戦うフランスもまたアイルランドを搾取する帝国であり、フランスがイギリスに勝利を収めても、その下に従属せざるをえず、英仏のいずれが勝利しようとの関係がないということを示しているように思える。奇しくもMcHughはイギリス軍に所属しながらもナポレオンに関連づけられた“davy”にDevilを読み込んでいる。だが、アイルランドも返す刀で斬られている。なぜなら悪魔であるその“davy”はダブリン海兵であったのだから。ジョイスはこのようにして、英仏の対立を転倒させること、帝国対植民地の構図を浮かび上がらせ、さらに、三者の関係を相互に分かちがたいものとして描き出している。

この両軍の兵士たちの紹介の後、“Assaye, assaye!” (8.26) という叫び声が差し挟まれる。これもまた、英仏の対立や、帝国と植民地の対立がもはや自明のものではなく、お互いが分かちがたく結びついていることを端的に体現する言葉のように思える。なぜなら、それはインドの地名、英語、そしてフランス語の合成語と考えられるからである。

Assayeとはインド西部のマハラシュトラ州の村の名前である。そこは第2次マラータ戦争中の1803年9月23日に、ウェリントン率いるイギリス軍とセポイの連合軍が、マラータ族の連合軍に対して勝利を収め、イギリスの圧倒的な軍事力を誇示した場所でもある。この戦争は再びイギリス帝国主義のイメージを喚起させるものである。それはイギリス兵が、Assayeでマラータ族を撃破したときのように、フランスを撃破しようというイギリス軍兵士たちが上げた闘いの声かもしれない。

しかし、それはまた抑圧された植民地側の人間による“I say, I say”という自己主張の決意を表明する言葉であるようにも思える。となれば、それは塹壕にうずくまって愚痴をこぼしているアイルランド少年兵が放つ言葉となるだろう。

さらに、それはフランス語のasseyezか、あるいはassezでもありうる。sit downを表す前者だとすれば、攻撃に耐えるために伏せろという劣勢なナポレオン軍の兵士が叫んでいるとも取れるし、後者であれば、もうこんな戦争はたくさん(enough)だという言葉にも聞こえる。反対に、この言葉は攻撃せよという意味のassailかもしれないし、tryを表す中期英語のassayeかもしれない。

以上のような相矛盾するメッセージを含むこの叫び声は、戦争の泥沼状態を表現するだけでなく、それが植民地（側）の言葉、英語、そしてフランス語の融合された言葉であるという点において、英仏の対立、そして帝国対植民地の対立の図式を突き崩している。

そのような戦場の泥沼の中にいる兵士たちは、“All of them arminus-varminus.” (8.27-28) という一言で要約されている。この表現を植民地アイルランドの立場に限定して捉えることも可能である。まず、“arminus”はarm-minusと解釈できる。これは武器を持たず、ただ塹壕にうずくまり、愚痴をこぼし、戦争に貢献しないナポレオン兵を指しているように思える。そう捉えれば、これは帝国に対抗するための武器を奪われた植民地アイルランドの立場を示唆しているとも解釈できる。

後半の“varminus”は、「害虫（寄生虫）のような、寄生虫のわいた；不潔な」という意味の verminous と「害獣、害鳥；嫌なやつ」を指す varmint の合成語である。そこから読みとれるのは、戦場での不潔な兵士たちの姿だけでない。それはイギリスによって虫けらのごとく扱われ、殺されるアイルランド人の存在である。同様に、イギリスに反発しつつも、「寄生虫」のように依存せざるをえない植民地アイルランドのイメージも重ねられている。

しかし、実際、この“arminus-varminus”という表現は、アイルランドもしくは植民地に限定された言葉ではなかった。確かに、戦場はイギリス兵もフランス兵もアイルランド兵も関係なく殺されていく場所である。その意味では、兵士たちを要約するこの言葉もまた、“Assaye, assaye!”と同様に、対立をなし崩しにするものと考えてよいだろう。

III. セポイによる戦争の終結

この挿話において再現されているワートルローの戦いの結末には、セポイの反乱が重ねられている。そのセポイを想起させる hinndoo Shimar Shin が、ウェリントンの愛馬とナポレオンの半分に割れた三角帽を爆破する場面でツアーガイドの案内が終わる。ここで二つの疑問が浮かび上がる。一つは、hinndoo Shimar Shin とは何者なのか、もう一つは、この爆破を戦争の終結と言えるのか、という疑問である。

では、これらの質問に答える前に、彼が初めて紹介される場面を見ておきたい。

This is hiena hinnessy laughing aloud at the Willingdone. This is lipsyg dooley krieging the funk from the hinnessy. This is the hinndoo Shimar Shin between the dooley boy and the hinnessy.

(10.04-07)

こちらは白人ハ・イエナ・ヒネシー氏、殺る気満慢ウイリンダンに屈服しつつ声を出して大笑い。こっちはライブツイヒの口パク担架兵ドゥーリー氏、ヒネシー氏の放つ悪臭と戦っています。こちらはヒネ・ドゥー教徒のシマール・シン、担架持ちの少年ドゥー

リーとヒネシー氏の間には挟まっています。

ポスト・コロニアリズムの批評家 Vincent J. Cheng は、*hinndoo Shimar Shin* を *hinnessy* と *dooley* (強調筆者) の合成された植民地側の人間と捉え、さらにインド人とアイルランド人とアメリカ人が融合した存在と特定している。²⁰ 果たして、彼のように、*hinndoo* を植民地側の人間と特定してよいのだろうか。

この疑問に答えるためには、*hinndoo Shimar Shin* を挟む *dooley boy* と *hinnessy* について見ていかなければならない。彼らは、アイルランド移民を親にもつアメリカ人 Finley Peter Dunne (1867-1936) のユーモア小説風のコラムに登場する人物で、Martin J. Dooley 氏と話し相手 Hennessy 氏をもじったものであることは間違いない。²¹ Dooley 氏は、近所の労働者たちを相手に、政治や社会、アイルランド系移民の生活について語るシカゴのバーの経営者である。ともにアイルランド系アメリカ人である。

hinnessy も Hennessy と同様にアイルランド系アメリカ人かもしれないが、帝国側の存在であるナポレオンに同定できる要素もある。その理由には六つある。第一に、この人物が声に出して (*aloud*)、無骨者 (*a lout*) のようにウェリントンに向かって大笑いする (*laughing a lot*) こと。この所作はイギリスに敵対するものであることを示している。第二に、彼がハイエナ ("*hiena*": *hyena*) と形容されていることである。ハイエナの残虐さ、卑劣さはナポレオンのものである。彼は自分の野心のためなら、平気で嘘もつくし、部下の信頼を平気で裏切った。さらにエジプト遠征 (1798-99) の際には、復讐を恐れて敵対的な態度を見せる町を焼き払うなど卑劣な行為を重ねた人物である。²² 第三に、アイルランド語の *fhionn*, すなわち *fair* を連想させる "*hiena*" には、その人物が白人であることが示唆されていること。第四に、その名前がナポレオンも愛飲したというフランス産のコニャック Hennessy を連想させること。²³ 第五に、ナポレオンとは切っても切れない馬のいななく声 (*hinny* [= *whinny*]) が重ねられていること。最後に、"*hiena*" には、1806年ナポレオンがプロイセン軍に大勝したドイツ中東部の都市イエナ (*Jena*) が重ねられていることが指摘できる。これらによって、*hinnessy* をナポレオンに関連づけされた人物と見なすことは十分に可能である。

一方、*dooley boy* は植民地側の存在を思わせる。少なくとも、Dooley 氏と同様にアイルランド系アメリカ人ということは容易に想像できる。だが、*hinnessy* との敵対関係を考慮に入れば、彼にはイギリスのイメージが重ねられているのかもしれない。しかし、もっとも強いイメージは、イギリス軍に所属する担架を担ぐインド人の少年兵のものである。というのも、その名前は「(インドで、病人や負傷者を肩でかついで運ぶ) 担架」(*dooly*) を連想させるからである。

さらに、*dooley* を植民地側の人間として同定できる要素は三つある。第一は、Dunne が腹話術師のように ("*lipsyg*": *lip-sync*) Dooley 氏に語らせる主張がきわめて反帝国主義的であったこと。第二は、この名前はアイルランド語で「色の黒い戦士」(*dark warrior*) を表すこと。²⁴ 第

三に、その名前は、知っているのに正しい名前が思い出せないときに、その場しのぎのために使うものでもあること。²⁵ これらは、帝国側にとって、取るに足らない人間でしかない植民地側の人間に同定するために十分な要素である。

Dunneのコラムの中の人物とは異なり、dooley boyとhinnessyは対立関係にある。dooley boyはhinnessyの放つ「火花」(“funk”: G funke)と「戦って」(“krieg”: G war) いるからである。²⁶ さらに、立場も逆転し、父親的な存在であったDooleyは、この挿話では少年になっている。これは、hinnessyが帝国に、dooleyが植民地に対応していることを示している。これは、前章で見た帝国対植民地の対立の転倒によく似ている。

hinndoo Shimar Shinをこの二人が合成された存在と見なすならば、この人物は支配側と支配される側の要素を併せ持つ存在と言うことになる。となれば、この人物を植民地側に属す存在とするChengの主張は崩れる。この見方を裏付けるものとして、hinndoo Shimar Shinが「コルシカ生まれの罵り屋シマール・シン」(“cursigan Shimar Shin”) (10.18) と呼ばれ、ナポレオンに関連づけられていることが挙げられる。

さらに、イギリス対するhinndoo Shimar Shinの怒り(“ranjymad”) (10.09)を共有する人物への言及も見られる。それは“Ranji”ことKumar Shri Ranjitsinhji (1872-1933)²⁷である。この天才クリケット選手は母国インドではなくイギリスでプレイすることを選び、オーストラリアを相手にイギリスのために戦った人物である。おそらく、彼は支配者と支配されるものに挟まれる苦しみを味わっていたのではないだろうか。その甲斐あってか、現役を引退してからは、マハラジャとしてジャムナガールに進歩的な改革を行ったとされる。²⁸

hinndoo Shimar Shinに重ねられる最も強いイメージは、インド初の独立戦争であるセポイの反乱を起こしたヒンドゥー教徒のセポイ(“seeboy”: sepoy) (10.15)である。セポイとはイギリス東インド会社に雇われていた有能なベンガル人の兵士で、インドとイギリスの間に立ち、イギリスによるインド支配に荷担した。セポイたちは支配する側と支配される側の間に挟まることの苦しみを感じていたのではないだろうか。彼らが引き起こしたセポイの反乱のために、イギリスによる支配を強めてしまい、かえってインドの独立を遠ざけてしまったという見方も成り立つからである。

hinndoo Shimar Shinという人物は、植民地の独立を阻害する存在でもあるようだ。彼は“dooforhim seeboy”(10.19)とも呼ばれる。この“dooforhim”には、Frederick Temple Hamilton-Temple-Blackwood, 1st Marquess of Dufferin and Ava (1826-1902)が潜んでいる。北アイルランド生まれのこのイギリスの外交官は、1884年から88年にかけてインド副王を務めた。彼はインド国民会議派の第一回大会の開催の提案に賛成し、分裂していたインドをまとめ、イギリスに対して発言する場を与えた。²⁹ そのため、インド独立に対するDufferinの貢献は大きいと言える。しかしながら、年々回を重ねるごとに組織がふくれあがり、イギリス政府への批判の声が大きくなると、彼はインド人の後援者から弾圧者へと態度を一変させたのである。

このような者たちが重ねられたhinndoo Shimar Shinが起こした爆破が、この戦争を終結に

導いたと考えてよいのだろうか。ここに示唆されているのは、帝国対植民地の対立の図式のなし崩しであり、終わりのなき戦いへの入り口が示されただけなのではないだろうか。確かに、帝国主義者ウェリントンの権威を高める白馬と、ナポレオンのエンブレムである三角帽をとともに爆弾によって吹き飛ばしたことは、一見 hinndoo Shimar Shin の勝利のようにも思える。しかし、ウェリントンやナポレオンが吹き飛ばされ死亡したわけではない。また、セポイの反乱の不本意な結末を想起させる面もある。したがって、この爆破を戦いの終結と呼ぶのはふさわしくない。そのような戦いにおいては、誰かが勝利するということはない。これは hinnessy と dooley の融合体としての hinndoo Shimar Shin の行為にふさわしい。このような視点から捉え直すならば、この挿話で再現されているのは、明白な対立も、完全な勝利や敗北も存在し得ない混沌とした世界と考えられる。

また、これは暴力による独立戦争の挫折を示唆しているようにも思える。それを裏付けるのは、この少年が「まぬけ」(“doof”), もしくは「ドジな奴」(duffer) を想起させる “dooforhim seeboy” (10.19) と呼ばれることにある。「アイルランドのため」(do for Erin) にもなる可能性があった彼の行為は、この暴力によって、ただ「自分のため」(do for him) だけを考える行為になってしまっており、結局「破滅のため」(do for ruin) にしかならなかったことが暗示されているからである。

註

- 1 Joyce, James. *Finnegans Wake*. With an Introduction by Seamus Deane, Penguin Books, 1992. ページ数, 行数はこの版に従った。翻訳はすべて拙訳である。
- 2 McHugh, Roland. *Annotations to “Finnegans Wake.”* Rev. ed. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1980, 1991. 解釈に関して特に断らない限りこの注釈を利用した。
- 3 元イギリス陸軍少尉という経歴を持つジョン・ストローソンは、『公爵(ウェリントン)と皇帝(ナポレオン)』(城山三郎訳, 新潮社, 1998年)の中で、これまでナポレオンの陰に隠れてきたウェリントンを再評価し、国際社会の力関係に周到な目配りをしながらも、一途に王と国家のための任務の遂行に努める高潔なウェリントンや、ときに部下思いで、情に厚いところを見せる人間的なウェリントンを描き出している。しかし、残念ながら、植民地側の視点は一切考慮されていない。原著は John Strawson. *The Duke and the Emperor: Wellington and Napoleon* (Constable and Company Ltd., 1994)。
- 4 “Magenta.” *Encyclopedia Americana*. International Edition. 1965.
- 5 De Liebaart. *The Battle of Courtrai or the Battle of the Golden Spurs*. 16 Jun. 2002 <http://home.tiscalinet.be/liebaart/gulden_e.htm>.
- 6 「メキシコ」の項、『世界大百科事典・年鑑・便覧』, 第二版, DVD-ROM, 日立デジタル平凡社, 1998.
- 7 “Goliad.” *Encyclopedia Americana*.
- 8 “Goliard.” *Encyclopedia Americana*.
- 9 Davenport, Harbert and Craig H. Roell. “Goliad Massacre.” *The Handbook of Texas Online Project*. 23 Jun. 2002 <<http://www.tsha.utexas.edu/handbook/online/articles/view/GG/qeg2.html>>.
- 10 フィッシャー, ルイス『ガンジー』, 古賀勝郎訳, 二十世紀の大政治家2, 紀伊國屋書店, 1968年, 203-04頁。原著は Louis Fischer. *The Life of Mahatma Gandhi* (Jonathan Cape, 1951)。
- 11 「Willingdon」の項、『リーダーズ・プラス』, 研究社, 1994年。

- 12 Tindall, William York. *A Reader's Guide to "Finnegans Wake."* Syracuse University Press, 1969, 1996, p.36.
- 13 一般に、マレンゴはアイルランドのウェックスフォードで生まれ育ったと信じられている。ここにも、フランスとアイルランドの関連づけを見出せる。しかし、Jill Hamiltonは近著 *Marengo: The Myth of Napoleon's Horse* (Fourth Estate, 2000) において、その伝説に疑いをかけている。
- 14 倉田保雄『ナポレオン・ミステリー』, 文春新書 186, 文藝春秋, 2001年, 114頁。
- 15 Cooper, Leonard. *The Age of Wellington: The Life and Times of the Duke of Wellington 1769-1852.* London: Macmillan. 1964, p.231.
- 16 Cheng, Vincent John. "The General and the Sepoy: Imperialism and Power in the Museyroom." *Critical Essays on James Joyce's "Finnegans Wake."* Ed. Patrick A. McCarthy. New York: G. K. Hall & Co., 1992, p.259.
- 17 Christiani, Dounia Bunis. *Scandinavian Elements of "Finnegans Wake."* Evanston, Ill.: Northwestern University Press. 1965, p.91.
- 18 *The Oxford English Dictionary.* 2nd ed. CD-ROM. Oxford: Oxford University Press. 1992.
- 19 ジョイス, ジェイムズ『フィネガンズ・ウェイク I・II』, 柳瀬尚紀訳, 河出書房新社, 1991年, 10頁。
- 20 Cheng, pp.262-64.
- 21 Glasheen, Adaline. *The Third Census of "Finnegans Wake."* Berkeley: University of California Press. 1977, p.76, p.127.
- 22 『ナポレオン・ミステリー』, 27頁。
- 23 「コニャック」の項, 『世界大百科事典・年鑑・便覧』。
- 24 "Dooley." *What's in Your Name: Dictionary of Last Names.* 16 Jun. 2002 <<http://www.vitalog.net/>>.
- 25 "Dooley." *Pseudodictionary.Com.* 16 Jun. 2002 <<http://www.pseudodictionary.com/>>.
- 26 Bonheim, Helmut. *A Lexicon of the German in "Finnegans Wake."* Berkeley: University of California Press. 1965, p.14.
- 27 Glasheen, p.243.
- 28 *1896 And All That: Vasant Raiji salutes the great Ranji, a century after the cricket, 16 July 1996.* 23 Jun. 2002 <http://www.cricket.org/link_to_database/PLAYERS/ENG/R/RANJITSINHJI_KS_01000213/ARTICLES/RANJITSINHJI_KS_RAIJI_16JUL1996.html>.
- 29 森本達雄『インド独立史』, 中公新書, 中央公論社, 1972年, 81-82頁。

(とよだ のりゆき 本学非常勤講師)